慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	保育学生の達成目標志向性に関する研究：保育職に対する心理的適応感との関連
Sub Title	Goal achievement orientation in students taking preschool teacher training courses : correlations with psychological adaptation to the job of a preschool teacher
Author	金子, 智昭(Kaneko, Tomoaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2019
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.87 (2019.) ,p.115- 130
JaLC DOI	
Abstract	Previous studies have indicated that goal achievement orientation is a motivational variable that affects practical training outcomes at kindergartens and microteaching. This study examined correlations between goal achievement orientation and psychological adaptation to the job of a preschool teacher by examining the effects of goal achievement orientation from different perspectives. The psychological adaptation indices indicated each participant's sense of aptitude for working as a preschool teacher, their efficacy as a preschool teacher, the degree of intention to become a preschool teacher, the intention to continue as a preschool teacher, and their orientation to an ideal image of a preschool teacher. A questionnaire was administered to pre-school teacher training students (N = 258; 132 first-year students and 126 second-year students). The results indicated that mastery goals, relational goals, and performance-related goals had positive effects on psychological adaptation to preschool teachers' jobs, whereas performance-avoidance goals had a negative effect on psychological adaptation. These results suggested that mastery goals relevant to intrinsic motivation, and relational goals relevant to altruistic motivation are important goals that encourage students to become preschool teachers, and facilitate their career development.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000087-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

保育学生の達成目標志向性に関する研究
—保育職に対する心理的適応感との関連—
Goal Achievement Orientation in Students Taking Preschool Teacher Training Courses
—Correlations with psychological adaptation to the job of a preschool teacher—

金　子　智　昭*,**
Tomoaki Kaneko

Previous studies have indicated that goal achievement orientation is a motivational variable that affects practical training outcomes at kindergartens and micro-teaching. This study examined correlations between goal achievement orientation and psychological adaptation to the job of a preschool teacher by examining the effects of goal achievement orientation from different perspectives. The psychological adaptation indices indicated each participant's sense of aptitude for working as a preschool teacher, their efficacy as a preschool teacher, the degree of intention to become a preschool teacher, the intention to continue as a preschool teacher, and their orientation to an ideal image of a preschool teacher. A questionnaire was administered to pre-school teacher training students (N＝258; 132 first-year students and 126 second-year students). The results indicated that mastery goals, relational goals, and performance-related goals had positive effects on psychological adaptation to preschool teachers' jobs, whereas performance-avoidance goals had a negative effect on psychological adaptation. These results suggested that mastery goals relevant to intrinsic motivation, and relational goals relevant to altruistic motivation are important goals that encourage students to become preschool teachers, and facilitate their career development.
Keywords: early childhood education students, achievement goal orientation, psychological adaptation to jobs as preschool teachers（保育学生，達成目標志向性，保育職に対する心理的適応感）

1．問題と目的

動機づけ理論の一つである達成目標理論（achievement goal theory）とは，個人の達成行動に対する目標の相違に着目した理論であり，また，目標追求に対する個人の安定的な特性のことを達成目標志

* 埼玉純真短期大学こども学科助教
** 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程3年

向性（achievement goal orientation）と言う。近年，諸外国における一連の研究結果として，教師の職務内容に対する達成目標志向性は，教師自身の認知や指導行動のみならず，子どもの学業成果などのアチーブメントにも広く影響を与える有力な概念であることが明らかとなっている（Butler, 2014）。

国内において，金子（2016）は，教師の達成目標志向性の概念を先駆的に幼児教育分野へ拡大し，マスタリー目標（保育者としての専門性や力量を形成し発展させることが目標），パフォーマンス接近目標（優れた教授能力を他者に示すことが目標），パフォーマンス回避目標（劣った教授能力を他者に披露することを避けることが目標），関係性目標（子どもとの親密な関係性を構築したり関係性に配慮したりすることが目標）の4下位尺度から構成される「幼稚園教諭志望学生版達成目標志向性尺度」を作成している。また，学生が保育者役と幼児役を相互に経験する模擬保育形式のマイクロティーチング（micro teaching）の学習成果との関連を検討した結果，マスタリー目標のみが学習成果の指標に正の影響を与えていることから，学生が保育者としての専門性や力量を伸ばすという目標を持つことの重要性が示された（金子，2016）。その後，金子（2018）は，金子（2016）の研究課題として，（a）実際の幼児を相手とした保育現場での実地経験を通した学習成果について検討すべきであること，（b）人は複数の目標を同時に保有するという多目標視点（multiple goals perspective）の観点を導入して検討すべきであることを指摘したうえで，達成目標志向性が幼稚園実習の学習成果に及ぼす影響を個人の達成目標志向性のタイプによる相違を考慮しながら検証した。その結果，（a）金子（2016）と同様に，マスタリー目標は実習成果の3つの指標（省察，保育者効力感，保育者の力量）に正の影響を与えること，（b）パフォーマンス回避目標のみが高い「回避目標志向型」のタイプの学生は，全ての目標が高い「多目標志向型」や関係性目標が高くパフォーマンス目標が低い「関係性目標志向型」の学生よりも，実習成果の得点が低いことが示された。金子（2016, 2018）の結果を踏まえると，マスタリー目標は一貫して学習成果を促すことから，保育者としての専門性や力量の形成を規定する重要な目標であり，その一方，回避動機が強く実習成果の獲得が芳しくなかった「回避目標志向型」の学生に対して，何らかの教育的支援を施す必要性があることが示唆された。これら2つの研究は，マイクロティーチングおよび幼稚園実習における“学習成果”の観点から，達成目標志向性の影響を検討したものである。今後の研究課題として，達成目標志向性の効果をより多角的に検討するために，学生の保育職に対する心理的適応感との関連を検討することが指摘されている（金子，2018）。

これまでの教師対象の達成目標志向性の研究では，教職への心理的適応感との関連が検討されている。得られた結果には多少の変動があるものの，概ね，マスタリー目標とパフォーマンス接近目標は心理的適応感と正の関連，パフォーマンス回避目標と仕事回避目標[1]は負の関連があるという傾向がみられている。例えば，職務満足感（job satisfaction）は，マスタリー目標と正の相関があるが，反対に，パフォーマンス回避目標とは負の相関が示されている（Papaioannou & Christodoulidis, 2007）。動機づけとの関連では，マスタリー目標は教授行動に対する興味（interest in teaching）に正の影響，仕事回避目標は負の影響を与えることが示されている（Retelsdorf, Butler, Streblow, & Schiefele, 2010）。また，現職者と教育実習生に共通して，マスタリー目標とパフォーマンス接近目標は教授効力（self-efficacy for teaching）に正の影響，パフォーマンス回避目標は負の影響を与えることが分かっている（Nitsche, Dickhäuser, Fasching, & Dresel, 2011）。さらに，精神的健康との関連では，マスタリー目標は問題焦点型コーピング（problem-focused coping）を媒介にバーンアウトを低下させ，パフォーマンス回避目標は情動焦点型コーピング（emotion-focused coping）を媒介にエンゲイジメントを低下させ

てバーンアウトを高めるというプロセスが確認されている（Parker, Martin, Colmar, & Liem, 2012）。同様に，パフォーマンス回避目標と仕事回避目標はバーンアウトに正の影響，マスタリー目標は負の影響を与えることも示されている（Retelsdorf et al., 2010）。これら海外の先行研究の結果から，教師としての専門性や力量を形成することを目標とするマスタリー志向の教師は，教職のやりがいや価値を実感しており，教授行動に対する動機づけが高く，精神的健康状態も良好であると言える。それとは対照的に，自身の劣った教授能力の披露を避けるパフォーマンス回避目標や少ない労力で職務を遂行することを目標とする仕事回避目標が高い教師は，教職に対するやりがいや価値の認識が低下しており，教授行動に対する動機づけも低く，精神的健康状態も悪化していることが推察される。こうした教師の達成目標志向性と教職に対する心理的適応―不適応感の関連パターンが，保育学生においても同様にみられるかどうか検討する必要があると考える。

保育学生および現職保育者は，キャリア形成過程において，しばしば保育職への適応に関する問題に直面する。例えば，学生の保育職の適応感に関して，保育職への夢を抱いて入学するものの，多くが短大生であるため入学後の心理社会的モラトリアムの期間が少ないのが実情であると言われ（西山・富田・田爪，2007），現に学生の自由記述には，「私は仕事が何があっているのかわからない。自信がない。（中略）本当に自分は子供が好きなのか分からない」「自分が本当に保育士になりたいのかわからなくなることがある」「悩みはこの職業で本当にいいのかなぁなんて，ね」「自分にはどんな仕事が合うのだろうか？」など，保育職への選択や決断に対する迷いや葛藤を表す言葉が多く見受けられる（西山・田爪・富田・中川，2004）。一方，保育現場では若手保育者の退職率の高さが問題視されているが（Benesse次世代育成研究所，2012），こうした高い退職率の背景として，保育職への不適応感が一因であることが報告されている。例えば，現職保育者の離職・転職に関する研究（石上・望月・徳田・横山，2001; 高見・桐原・徳田・横山・横山，1994; 高見・桐原・徳田・横山，1995）によると，離職・転職の理由は，職場の人間関係におけるトラブル，次いで給与・手当などの労働条件が多い傾向にあるが，「適性・能力に対する疑問」「保育に対する自信喪失」「精神的・肉体的負担」「仕事内容（やりがいのなさ）」「仕事がうまく進まない，失敗」「保育以外の仕事をしてみたかった」など，保育職への不適応感を象徴する理由も一定数の割合でみられる。このように，保育学生から現職者に至るまでの保育に携わる者は，少なからず保育職に対する適応感の問題に直面化し，その苦悩や困難を乗り越えていくことがキャリア形成の課題にもなっていると考えられる。離職率の高さなど保育職のキャリア発達に関する諸問題が取り上げられる中，保育者養成校では，学生の保育職の適性感などの職業認知を向上させる支援プログラムの作成や実施が求められるようになっている（西山ら，2007）。古くより多くの研究が為されている達成目標理論の研究分野では，学習者のマスタリー目標を促すための教育環境のあり方（教室の目標構造，教師の指導方略など）がモデルとして具体的に提言されており（e.g., Ames, 1992），現在では，教師の達成目標志向性に影響を及ぼす学校の目標構造についても実証研究が広まりつつある（Cho & Shim, 2013）。達成目標理論では，個人の目標操作を比較的容易に行うことができるという特徴が指摘されており（村山，2003），教育実践への応用化が為されやすい研究領域と言える。その点において，達成目標理論の観点から学生の保育職への心理的適応感の様相が示されれば，適応感の低い学生に対する支援プログラムの開発などを通して，高等教育における教育実践へ還元できる可能性が高まることが期待される。

以上の問題を踏まえて，本研究では，保育学生の達成目標志向性と保育職への心理的適応感の関連を

検討することを目的とする。なお，学生の保育職への心理的適応感を総合的に捉えるために，(a) 保育職の適性感と保育に対する能力信念，(b) 保育職の志望度と継続意思，(c) 理想の保育者像への志向性，の3つの側面から考察する。以下では，3つの側面に沿って本研究で取り上げる変数を説明する。

第1に，(a)「保育職の適性感と保育に対する能力信念」として，「保育職の適性感」と「保育者効力感」の2つの変数を取り上げる。保育職の適性感は，保育者としての肯定的な自己評価を意味しており，保育学生の保育職に対する充実感・満足感の予期，保育職に対する興味・関心，保育職へのコミットメントといった職業認知に関する諸変数を強く規定することが示されている（西山ら，2007）。また，保育者効力感とは，「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」（三木・桜井，1998）と定義される。保育学生における保育者効力感は，保育職への適性度と正の関連（三木，2016），大学生活に対する不適応感と負の関連がある（橋本，2016）。また，将来的に保育者になりたいと願う保育者志向の高い学生は，保育者効力感も高いことが示されている（田中秀，2002）。一方で現職者の保育者効力感は，職務上のストレスや精神的疲労感を低減させたり（西坂，2002；田中昭，2002），職務内容の満足感を媒介に抑うつを低減させる（前田・金丸・畑田，2009）など，とりわけ保育者の精神的健康を予測する概念でもある。

第2に，(b)「保育職の志望度と継続意思」として，「保育職の志望度」と「保育職の継続意思」の2つの変数を取り上げる。保育職の志望度が高い学生は，保育者効力感も高く（嘉数・渡嘉敷，2000），子どもを愛おしく個別的な存在として温かく肯定的な見方をする（嘉数・島袋・當山・喜友名・友利・廣瀬，1997）。また，学生の保育職の継続意思は，保育職への興味・関心と正の関連（西山ら，2007），現職者においては職務満足感と正の関連があることが示されている（岡本・新井野，2013）。

第3に，(c)「理想の保育者像への志向性」として，「理想自己への志向性」（水間，2004）の概念を“理想の保育者像”として適用し，「理想の保育者像への志向性」を変数に用いることにする。理想自己への志向性とは，「現実の自己とは何らかの点で異なった理想の自己の実現を自らに求める，意識的かつ直接的な自己への働きかけ」（水間，2004）と定義される。とりわけ，青年期における理想自己への志向性は，精神的健康や自己形成において重要であり，例えば，大学生における理想自己への志向性は，自尊感情と正の関連があり（山田，2004；水間，2007），自己成長への意欲を促すことが示されている（水間，2007）。そのため，保育学生が抱く理想の保育者像への志向性は，学生の保育職への心理的適応感の指標として捉えることができると考えられる。さらに山田（2004）は，理想自己への志向性の研究に，理想自己と類似概念である“目標研究”の視点や指標を導入して検討すべきであると提言している。これより，目標研究の概念である達成目標志向性は，理想の保育者像への志向性と一定の関連を示すことが予想される。なお本研究では，水間（2004）の理想自己の定義を参考に，理想の保育者像への志向性を「現実の保育者としての自己とは，何らかの点で異なった理想の保育者像への実現を自らに求める，意識的かつ直接的な自己への働きかけ」と定義する。

以上より本研究では，保育職の適性感，保育者効力感，保育職の志望度，保育職の継続意思，理想の保育者像への志向性，の5つを心理的適応感の指標として取り上げ，保育学生の達成目標志向性と保育職に対する心理的適応感の関連を明らかにする。

2. 方法

1. 調査対象者

2016年の5月から9月にかけて，埼玉県内の保育者養成系の女子短期大学に在籍する保育学生258名（1年生：132名，2年生：126名，平均年齢：18.86歳，*SD*＝1.07）を対象に，筆者が担当する講義の時間を活用して質問紙調査を行った。研究上の倫理的配慮として，質問紙配布時に，調査参加への同意を紙面と口頭にて伝達し，承諾を得た。また表紙には，質問紙はテストではなく正しい答えや間違った答えはないこと，成績には一切関係がないことを伝え，回答者が自分の気持ちに正直に答えられるように配慮した。なお，質問紙の回答に大きな不備が見られなかったため，以降，全てのサンプルを分析対象とした。

2. 調査内容

2-1. 達成目標志向性

学生の達成目標志向性を測定するために，「幼稚園教諭志望学生版達成目標志向性尺度」（金子，2016）を用いた。尺度は，マスタリー目標（「保育を通して，自分自身の学びが深まった時」，「子ども（たち）の実態に即した保育計画を立てることができた時」，「保育を通して，自分自身の指導改善を実感した時」，「子ども一人ひとりを把握する力がついてきたと感じた時」の4項目），パフォーマンス接近目標（「自分のクラスが他のクラスよりも規律正しかった時」，「自分のクラスの製作が，他のクラスよりも優れていた時」の2項目），パフォーマンス回避目標（「保育者としての力量が乏しいことを，同僚や管理職などに気づかれなかった時」，「自分のクラスの製作が，他のクラスよりも劣っていることを周囲に気づかれなかった時」，「クラスをまとめられないでいる自分の指導能力の低さを，同僚や管理職などに気づかれなかった時」の3項目），「関係性目標」（「子ども（たち）と温かい関係性を，築くことができた時」，「子ども（たち）と遊びの楽しさを共有できた時」，「遊びを通して，子ども（たち）との一体感を持てた時」の3項目）の4下位尺度，計12項目である。

教示は，「将来あなたが保育者（教育者）となってクラスを担任した時，どのような場合に達成感や充実感を感じると思いますか」とした。「あてはまる」（4点）から「あてはまらない」（1点）までの4段階で評定を求めた。

2-2. 保育職の適性感

西山ら（2007）を参考に，「保育という職業は自分の適性に合っている」，「保育という職業は自分の能力を活かすことができる」の2項目を用いた。「非常に思う」（4点）から「全く思わない」（1点）までの4段階で評定を求めた。

2-3. 保育者効力感

保育者効力感尺度（三木・桜井，1998）の1下位尺度10項目（「私は，子どもにわかりやすく指導することができると思う」，「私は，子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う」，「保育プログラムが急に変更された場合でも，私はそれにうまく対処できると思う」，「私は，どの年齢の担任になっても，うまくやっていけると思う」，「私のクラスにいじめがあったとしても，うまく対処できると思

う」,「私は，保護者に信頼を得ることができると思う」など）を用いた。「非常にそう思う」（5点）から「ほとんどそうは思わない」（1点）までの5段階で評定を求めた。

2-4.　保育職の志望度

「将来，あなたは保育職にどの程度就きたいと思っていますか」の1項目で尋ねた。「強く思う」（4点）から「全く思わない」（1点）までの4段階で評定を求めた。

2-5.　保育者の継続意思

「事情が許すなら，保育職をいつまで続けたいですか」の1項目で尋ねた。「1.定年まで」,「2.出産まで」,「3.結婚まで」,「4.その他」の中から，いずれか一つの番号を〇で囲んでもらった。なお,「4.その他」を選んだ場合，その具体的な内容を記述してもらうようにした。

2-6.　理想の保育者像への志向性

水間（2002）と山田（2004）を参考に，以下の3つのステップから，理想の保育者像に対する自由記述と評定を求めた。第1ステップは,「“自分はこういう保育者になりたい”という理想の保育者のイメージを思い浮かべてください。その理想の保育者について，良い悪いの判断をするわけではありませんので，あなた自身が思いつくままに，以下の①～③（※3個すべて）に自由に記入してください」と教示し，理想の保育者像を3つ表出してもらった。

第2ステップは,「先に挙げた3つの理想の中で，あなたが最も重要と感じる理想の保育者を，以下の□に記入してください（※3つに分けて書いたものが1つにまとまるのであれば，まとめても構いません）」と教示し，第1ステップで表出した自由記述のうち，最も重要と考える理想の保育者像を四角の枠の中に記述してもらった。

第3ステップは,「今，□に書いてもらったことについて，これからいくつかの質問をしていきます。以下の項目は，あなたにどの程度あてはまりますか」と教示し，水間（2002）の理想自己への志向性を問う1下位尺度の12項目に評定してもらった。これらの項目は,「□の実現に対してふだんから深く関わろう（取り組もう）としている」,「□を実現させるために，できる限り努力しようと思う」,「どうすれば□を実現できるか，常に考えている」,「たとえ周りが反対しても，□の実現のために頑張っていこうと思う」,「自分がたとえ□と違っていても，理想は理想だからそれでいい（逆転項目）」,「もしも□を実現できなくても，それはそれで仕方がない（逆転項目）」など，保育学生が理想の保育者像の実現を普段の生活においてどの程度求めているかを表している。「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）までの5段階で評定を求めた。

3.　結果

3-1.　各変数の基礎統計量および学年差の検討

本研究で用いる量的変数（マスタリー目標，パフォーマンス接近目標，パフォーマンス回避目標，関係性目標，保育職の適性感，保育者効力感，保育職の志望度，理想の保育者像への志向性）の平均値および標準偏差，α係数，項目数，得点範囲をTable 1に示す。次に，Table 1の各変数に関して，学年間の平均値の差をt検定によって検討した（Table 2）。その結果，保育職の適性感（$t(255)=3.66$,

Table 1　各変数の基礎統計量

		M（SD）	α係数	項目数	得点範囲
達成目標志向性	1. マスタリー目標	3.50（.47）	.72	4項目	1–4
	2. パフォーマンス接近目標	3.05（.70）	.71	2項目	1–4
	3. パフォーマンス回避目標	1.92（.80）	.91	3項目	1–4
	4. 関係性目標	3.77（.38）	.75	3項目	1–4
保育職への心理的適応感	5. 保育職の適性感	2.84（.58）	.69	2項目	1–4
	6. 保育者効力感	2.96（.57）	.89	10項目	1–5
	7. 保育職の志望度	2.89（.80）	—	1項目	1–4
	8. 理想の保育者像への志向性	3.76（.57）	.85	12項目	1–5

Table 2　各変数の学年間の差の検討

		1年生		2年生		t値	効果量（d）
		M	SD	M	SD		
達成目標志向性	1. マスタリー目標	3.48	(.45)	3.52	(.50)	$0.41^{n.s.}$	.09
	2. パフォーマンス接近目標	3.12	(.71)	2.98	(.69)	$1.61^{n.s.}$	.20
	3. パフォーマンス回避目標	1.89	(.87)	1.96	(.74)	$0.63^{n.s.}$	.09
	4. 関係性目標	3.82	(.35)	3.73	(.42)	$1.76^{n.s.}$	.23
保育職への心理的適応感	5. 保育職の適性感	2.97	(.62)	2.71	(.49)	3.66^{***}	.47
	6. 保育者効力感	3.14	(.56)	2.76	(.51)	5.58^{***}	.47
	7. 保育職の志望度	3.01	(.72)	2.78	(.86)	2.29^{*}	.29
	8. 理想の保育者像への志向性	3.89	(.57)	3.62	(.55)	3.83^{***}	.48

$^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$

$p<.001$），保育者効力感（$t(254)=5.58$, $p<.001$），保育職の志望度（$t(244)=2.29$, $p<.05$），理想の保育者像への志向性（$t(246)=3.83$, $p<.001$）で有意差が確認され，いずれの変数においても，1年生の方が2年生よりも高かった。また，質的変数である保育職の継続意思（定年まで，出産まで，結婚まで，その他）と学年（1年生，2年生）の関連を検証するために，χ^2検定を行った。その結果，$\chi^2=2.41$, $df=3$, *n.s.* であり，保育職の継続意思の学年差は確認されなかった。これより以降の分析では，学年差が確認された保育職の適性感，保育者効力感，保育職の志望度，理想の保育者像への志向性の4つの変数については，学年差も考慮して検証を進めることにする。

3-2.　達成目標志向性と保育職の適性感，保育者効力感，保育職の志望度，理想の保育者像への志向性の関連

達成目標志向性と心理的適応感に関する4変数の間のピアソンの相関係数を，全体と学年ごとに分けて算出した（Table 3）。全体では，マスタリー目標は，保育職の適性感（$r=.28$），保育者効力感（$r=.31$），保育職の志望度（$r=.23$），理想の保育者像への志向性（$r=.40$）と正の相関があった。パフォーマンス接近目標は，保育職の適性感（$r=.17$）と正の相関があった。パフォーマンス回避目標は，保育職の志望度（$r=-.13$），理想の保育者像への志向性（$r=-.33$）と負の相関があった。関係性目標は，保育職

Table 3　各変数の相関行列

		1	2	3	4
達成目標志向性	1. マスタリー目標		.31**	−.06	.63**
	2. パフォーマンス接近目標	(.31**/.29**)		.30**	.14*
	3. パフォーマンス回避目標	(−.01/.02)	(.26**/.37**)		−.23**
	4. 関係性目標	(.70**/.56**)	(.18*/.09)	(−.28**/−.17)	
保育職への心理的適応感	5. 保育職の適性感	(.23**/.25**)	(.10/.23**)	(.03/−.01)	(.17/.29**)
	6. 保育者効力感	(.33**/.17)	(.03/.12)	(−.01/−.04)	(.25**/.17*)
	7. 保育職の志望度	(.22*/.20*)	(.10/.02)	(−.09/−.16)	(.17/.22*)
	8. 理想の保育者像への志向性	(.33**/.39**)	(.01/−.09)	(−.34**/−.31**)	(.40**/.31**)

		5	6	7	8
達成目標志向性	1. マスタリー目標	.28**	.31**	.23**	.40**
	2. パフォーマンス接近目標	.17**	.10	.07	−.01
	3. パフォーマンス回避目標	.00	−.10	−.13*	−.33**
	4. 関係性目標	.24**	.23**	.21**	.37**
保育職への心理的適応感	5. 保育職の適性感		.47**	.36**	.34**
	6. 保育者効力感	(.44**/.43**)		.29**	.41**
	7. 保育職の志望度	(.31**/.39**)	(.22**/.30**)		.29**
	8. 理想の保育者像への志向性	(.34**/.26**)	(.37**/.34**)	(.26**/.28**)	

*p<.05, **p<.01
注：右上は全体の相関である。左下の括弧内の左は1年生，右は2年生の相関である。

の適性感（r=.24），保育者効力感（r=.23），保育職の志望度（r=.21），理想の保育者像への志向性（r=.37）と正の相関があった。また，これらの変数間の関連性について，学年間で差がみられた（Table 3の左下の相関行列を参照）。

達成目標志向性が心理的適応感に及ぼす影響性を1年生と2年生の相違を考慮して検証するために，多母集団同時分析によるパス解析を行った。最初に，達成目標志向性の4つの変数から，心理的適応感の4つの変数に対してパスを引いた。その次に，(a) 1・2年生の両群ともに有意差（5%水準）がみられないパスは削除する，(b) 両群またはどちらか一方でも有意なパスがみられた場合はそのパスを残す，という2つの基準を設けて，探索的にパスを構成した（Figure 1）。作成したモデルに対して，配置不変性のモデル（集団間でモデルは同じであっても，各群の間に推定値の差があることを許容するモデル）の適合度は，$\chi^2(16)$=15.13, p=.51, GFI=.98, AGFI=.93, RMSEA=.00, AIC=127.13であった。配置不変性のモデルに対して，1年生と2年生の間に推定値の差があるか否かを，一対比較によって検証した結果，有意差はみられなかった。次に，パス係数の値に等値制約を課したモデル（集団間で推定値の差が同じであると仮定したモデル）の適合度を算出した結果，$\chi^2(24)$=24.30, p=.44, GFI=.97, AGFI=.93, RMSEA=.00, AIC=120.30であった。両モデルの適合度は高かったが，AICの得点は等値制約を課したモデルの方が高かった。このことにより，集団間に推定値の差がないと仮定するモデルの方を採用することにした。Figure 1のパス係数の値をみていくと，1・2年生ともに有意なパスが示されたのは，マスタリー目標から保育者効力感（β=.33, β=.19），パフォーマンス回避目標から理想の保

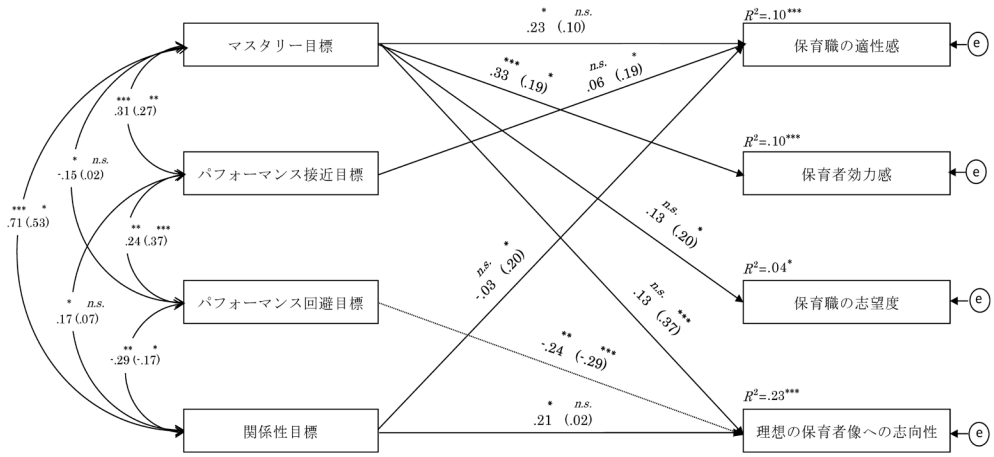

Figure 1　達成目標志向性が保育職への心理的適応感に与える影響
$\chi^2(24)=24.30$, $p=.44$, GFI=.97, AGFI=.93, RMSEA=.00, AIC=120.30
$^*p<.05$ $^{**}p<.01$ $^{***}p<.001$
注1：R^2は決定係数，パスに隣接した値は標準偏回帰係数を示す。
注2：括弧内は，2年生の値を示す。
注3：誤差間の相関は省略した。
注4：破線は負のパスを示す。

育者像への志向性（$\beta=-.24$, $\beta=-.29$）であった。また，1年生のみに有意なパスが示されたのは，マスタリー目標から保育職の適性感（$\beta=.23$），関係性目標から理想の保育者像への志向性（$\beta=.21$）であった。2年生のみに有意なパスが示されたのは，マスタリー目標から保育職の志望度（$\beta=.20$）と理想の保育者像への志向性（$\beta=.37$），パフォーマンス接近目標から保育職の適性感（$\beta=.19$），関係性目標から保育職の適性感（$\beta=.20$）であった。

3-3.　達成目標志向性と保育職の志望度および継続意思の関連

達成目標志向性と保育職の継続意思の関連を検討するに当たり，初めに「その他」を選択した35名（全体の14.3%）の記述内容の類似性に基づきカテゴライズを行った結果，4つのカテゴリーが作成された（Table 4）。「ライフイベントに伴う退職・復帰・継続」（60.0%）の出現率が最も高く，次いで，「体力」（14.2%），「心理的変化」（8.5%），「転職・金銭の貯蓄」（8.5%）であった。これら4つのカテゴリーに該当しない「分類不可」の記述内容として，3つ（8.5%; 就職園による／できることならば，働きたくない／一概には決められない）がみられた。「ライフイベントに伴う退職・復帰・継続」は，記述数の多くを占めていたカテゴリーであり，他のカテゴリーと異なり保育職の勤め方に関する内容であった。そのため，「その他」を選択した35名のうち，「ライフイベントに伴う退職・復帰・継続」を記述した21名を，次の分析の対象者に取り上げることにした。

「定年まで」（$n=39$），「出産まで」（$n=128$），「結婚まで」（$n=42$），「ライフイベントに伴う退職・復帰・継続」（$n=21$）の4つを独立変数，達成目標志向性のそれぞれを従属変数とする一要因分散分析を行った（Table 5）。その結果，マスタリー目標（$F(3, 226)=4.86$, $p<.01$），パフォーマンス回避目標（$F(3, 226)=4.06$, $p<.01$），関係性目標（$F(3, 228)=7.55$, $p<.001$）において有意差がみられたため，

Table 4　保育職の継続意思における「その他」のカテゴリー（N=35）

カテゴリー	記述例	出現率（%）
1. ライフイベントに伴う退職・復帰・継続	結婚を機に退職し，もう一度復帰したい／出産後に，パートとして働きたい／出産してから，育児休暇を取って定年まで続けたい／結婚して子どもを産んで，落ち着く頃まで／自分の子どもが自立するくらいまで／子どもができたら退職し，子どもが大きくなったら復帰して定年までやりたい	21（60.0%）
2. 体力	体力的に限界がくるまで／体力が持つまで／できれば，心と体がしっかりと動くまで	5（14.2%）
3. 心理的変化	やりきれたと思うまで／辞めたいと思うまで／飽きるまで	3（8.5%）
4. 転職・金銭の貯蓄	調理学校に通いたいので，お金が貯まるまで／転職するまで／生活に困らない程度の貯金ができるまで	3（8.5%）
分類不可	就職園による／できることならば，働きたくない／一概には決められない	3（8.5%）

注：「ライフイベントに伴う退職・復帰・継続」におけるライフイベントの内容は，「結婚」「出産」「母としての育児」「子どもの自立」であった。

Table 5　達成目標志向性と保育職の継続意思の基礎統計量と一要因分散分析

	定年まで（n=39）	出産まで（n=128）	結婚まで（n=42）	ライフイベントに伴う退職・復帰・継続（n=21）	F値	多重比較（5%水準）
マスタリー目標	3.59（.41）	3.60（.45）	3.32（.47）	3.67（.36）	4.86**	定年・出産・ライフイベント＞結婚
パフォーマンス接近目標	3.13（.76）	3.04（.66）	3.02（.74）	3.14（.82）	0.28	*n.s.*
パフォーマンス回避目標	1.84（.88）	1.87（.78）	2.33（.87）	1.76（.76）	4.06**	結婚＞定年・出産・ライフイベント
関係性目標	3.80（.36）	3.86（.27）	3.58（.49）	3.87（.24）	7.55***	定年・出産・ライフイベント＞結婚

**p<.01, ***p<.001

TukeyのHSD法による多重比較（5%水準）を行った。その結果，「定年まで」「出産まで」「ライフイベントに伴う退職・復帰・継続」の学生は，「結婚まで」の学生よりも，マスタリー目標と関係性目標が高く，パフォーマンス回避目標が低いことが示された。

3-4.　達成目標志向性と理想の保育者像のカテゴリーの関連

初めに，理想の保育者像のあり方（内容）を特定するために，学生が最も重要と感じる理想の保育者像の内容に基づき，カテゴライズを行った（Table 6）。その際のカテゴリー化は，溝上（2001）の「上位次元ー下位次元の階層カテゴリー化」を参考とした。これは，上位次元に視点の中心をおき，そこから下位次元を作成する2段階階層によってカテゴライズする方法である。理想の保育者像の上位カテゴリーは，「子ども」「自己」「社会」の3つが適切と判断した。さらに下位カテゴリーについて，子どもは「心情理解」「子ども尊重・援助」「子どもからの尊敬」の3つ，自己は「態度」「成長・充実」「保育者としての指導力」の3つ，社会は「周囲からの信頼」「保護者支援」の2つの計8つを設定した。筆者と心理学を専攻する大学院生1名が，学生の自由記述を基に，各カテゴリーに対して合致する場合を「1」，合致しない場合を「0」として評定した。評定者の2名が個別に評定をした後，評定者間の一致率

Table 6　理想の保育者像のカテゴリーと学年間の出現率の差の検定（χ^2検定）

上位カテゴリー	下位カテゴリー	記述例	度数（%）1年生N=131	度数（%）2年生N=125	$\chi^2(1)$
子ども	心情理解	子どもの気持ちに気づける・共感できる・寄り添える／子どもの小さな変化に気づける／子ども一人ひとりの特徴や性格を理解できる／子どもと同じ気持ちになれる	21 (11.9)	29 (16.2)	2.09$^{n.s.}$
	子ども尊重・援助	子ども一人ひとりの個性や感性を大切にする／子どもの思いやりや優しさを育てられる／子ども一人ひとりに目を向けて力になれる／子どものことを一番に考えて行動する	19 (10.8)	24 (13.4)	1.00$^{n.s.}$
	子どもからの尊敬	子どもから愛される／子どもから好かれる／子どもに人気で慕われる／子どもの見本（手本）となる／子どもの印象（思い出）に残る／子どもからいつまでも感謝される	9 (5.11)	9 (5.02)	0.11$^{n.s.}$
自己	態度	元気／明るい／温かい／優しい／笑顔あふれる／積極的に行動できる／礼儀正しい／責任感が強い／平等に接する／周囲の気配りができる／何事もポジティブに受け止める	58 (33.0)	43 (24.0)	2.61$^{n.s.}$
	成長・充実	子どもと接していくなかで，保育者として日々成長できる／毎日の気づきを今後に生かしていける／子どもと一緒に楽しめる／自分なりに楽しんで保育ができる	3 (17.0)	6 (3.35)	1.18$^{n.s.}$
	保育者としての指導力	子ども一人ひとりに合わせた適切な保育ができる／子どもが楽しめる（過ごしやすい）環境づくりができる／メリハリのある指導ができる／知識が豊富にある	7 (3.97)	20 (11.2)	7.69**
社会	周囲からの信頼	周囲から信頼される／子どもが困った時に信頼される／先生から仕事を任せてもらえるような信頼関係が築ける／保護者に「子どもを安心して預けられる」と思ってもらえる	54 (30.7)	47 (26.3)	0.35$^{n.s.}$
	保護者支援	保護者と共に，子どもを育てていくことができる／保護者としっかりコミュニケーションがとれる／保護者を支えられる／保護者の気持ちを考えられる	5 (2.84)	1 (0.55)	2.54$^{n.s.}$

$^{**}p<.01$
注：一人の対象者の記述は複数にカテゴライズされている場合がある。

を算出した。一致率は，91.8%～98.6%であった。具体的には，「心情理解」（93.0%），「子ども尊重・援助」（92.1%），「子どもからの尊敬」（95.0%），「態度」（94.1%），「成長・充実」（98.6%），「保育者としての指導力」（93.0%），「周囲からの信頼」（91.8%），「保護者支援」（98.2%）であった。評定者間で一致し

Table 7　t検定による達成目標志向性の平均値(SD)の比較―理想の保育者像の下位カテゴリーの有無による検討―

	心情理解			子ども尊重・援助			子どもからの尊敬			態度		
	無群	有群	t値	無群	有群	t値	無群	有群	t値	無群	有群	t値
マスタリー目標	3.54 (.45) (n=200)	3.62 (.40) (n=47)	$1.09^{n.s.}$	3.53 (.45) (n=205)	3.65 (.41) (n=42)	$1.62^{n.s.}$	3.56 (.45) (n=229)	3.46 (.48) (n=18)	$0.92^{n.s.}$	3.52 (.45) (n=147)	3.61 (.42) (n=100)	$1.59^{n.s.}$
パフォーマンス接近目標	3.08 (.69) (n=202)	2.93 (.78) (n=47)	$1.37^{n.s.}$	3.07 (.72) (n=207)	2.99 (.66) (n=42)	$0.65^{n.s.}$	3.05 (.70) (n=231)	3.11 (.81) (n=18)	$0.35^{n.s.}$	3.00 (.43) (n=149)	3.14 (.68) (n=100)	$1.46^{n.s.}$
パフォーマンス回避目標	1.97 (.82) (n=201)	1.74 (.77) (n=47)	$1.72^{n.s.}$	1.93 (.80) (n=206)	1.87 (.91) (n=42)	$0.42^{n.s.}$	1.91 (.82) (n=230)	2.02 (.80) (n=18)	$0.51^{n.s.}$	1.87 (.71) (n=148)	2.00 (.84) (n=100)	$1.23^{n.s.}$
関係性目標	3.78 (.37) (n=202)	3.91 (.20) (n=47)	3.44^{**}	3.80 (.36) (n=207)	3.85 (.29) (n=42)	$0.90^{n.s.}$	3.80 (.36) (n=231)	3.85 (.23) (n=18)	$0.11^{n.s.}$	3.83 (.33) (n=149)	3.77 (.37) (n=100)	$1.11^{n.s.}$
	成長・充実			保育者としての指導力			周囲からの信頼			保護者支援		
	無群	有群	t値	無群	有群	t値	無群	有群	t値	無群	有群	t値
マスタリー目標	3.36 (.44) (n=238)	3.25 (.53) (n=9)	$1.67^{n.s.}$	3.56 (.44) (n=223)	3.49 (.48) (n=24)	$0.72^{n.s.}$	3.55 (.45) (n=148)	3.56 (.44) (n=99)	$0.15^{n.s.}$	3.55 (.44) (n=241)	3.67 (.43) (n=6)	$0.63^{n.s.}$
パフォーマンス接近目標	3.07 (.71) (n=240)	2.67 (.75) (n=9)	$1.66^{n.s.}$	3.06 (.71) (n=224)	3.04 (.72) (n=25)	$0.10^{n.s.}$	3.05 (.71) (n=149)	3.06 (.72) (n=100)	$0.01^{n.s.}$	3.06 (.71) (n=243)	3.00 (.83) (n=6)	$0.18^{n.s.}$
パフォーマンス回避目標	1.92 (.82) (n=239)	1.89 (.74) (n=9)	$0.12^{n.s.}$	1.93 (.83) (n=224)	1.81 (.61) (n=24)	$0.73^{n.s.}$	1.86 (.82) (n=148)	2.01 (.80) (n=100)	$1.39^{n.s.}$	1.92 (.82) (n=242)	2.11 (.68) (n=6)	$0.57^{n.s.}$
関係性目標	3.81 (.34) (n=240)	3.63 (.78) (n=9)	$0.42^{n.s.}$	3.81 (.33) (n=224)	3.75 (.50) (n=25)	$0.62^{n.s.}$	3.80 (.37) (n=149)	3.81 (.31) (n=100)	$0.32^{n.s.}$	3.80 (.35) (n=243)	3.94 (.13) (n=6)	$0.98^{n.s.}$

$^{**}p<.01$

なかったカテゴリーについては，評定者2名が学生の自由記述に戻り，その内容を討議したうえで，1もしくは0のコードに振り分けた。さらに，学年ごとのカテゴリーの出現率の差を，χ^2検定により検討した（Table 6参照）。その結果，2年生の方が1年生よりも，「保育者としての指導力」の頻度が高いことが示された（χ^2（1）=7.69, $p<.01$）。

次に，達成目標志向性と理想の保育者像の関連を検討するために，8つの下位カテゴリーごとに有群と無群に分けて，達成目標志向性の得点に差がみられるかどうかt検定を行った（Table 7）。各カテゴリーに関して，自由記述に表記していた者を有群，表記していなかった者を無群として振り分けた。結果，「心情理解」における関係性目標の得点に有意差（t(129)=3.44, $p<.01$）が確認され，有群は無群よりも，関係性目標の得点が高いことが示された。

4.　まとめと考察

本研究の目的は，保育学生の達成目標志向性と保育職への心理的適応感の関連を検討することであった。まず，各変数の基礎統計量に基づくt検定の結果，2年生は1年生よりも，心理的適応感の4つの指標が低いことが示された。一般的に，保育者養成短期大学における学習カリキュラムは，学年が進むにつれて，応用的で実践的な内容へと段階的に移行するように定められている。また，短期大学における2年次は就職活動が本格的に開始される時期であり，2年生は保育職への進路決定に対する悩みや葛藤をより強く感じると考えられる。このように，2年生は1年生よりも，保育職という専門性の難しさや

職務者としての意識を強く自覚するようになるため，保育職への心理的適応感が低かったと考えられる。

次に，達成目標志向性が保育職への心理的適応感に与える影響を，学年差を考慮した多母集団同時分析のパス解析により検証した。その結果，最終的に作成されたモデルの適合性の高さが示された。これまで，達成目標志向性はマイクロティーチングや幼稚園実習による学習成果に影響を与える動機づけ変数であることが分かっているが（金子，2016, 2018），本研究より保育職への心理的適応感にも影響を及ぼすことが明らかとなった。各変数の関連から総合的に判断すると，マスタリー目標，関係性目標，パフォーマンス接近目標は，心理的適応感に正の影響を与えていた。特にマスタリー目標は，心理的適応感の全ての変数にパスが伸びており，最も幅広い影響性が検出された。保育者としての力量や専門性を伸ばすという内発的な目標を持つことは，保育職への心理的適応感を支える基盤になることが示唆された。次に影響範囲が広かったのは関係性目標であり，保育職の適性感と理想の保育者像への志向性に対してパスが伸びていることから，対人関係職に特有の利他的動機づけも心理的適応感を向上されるうえで重要であることが示された。さらに，2年生におけるパフォーマンス接近目標は，保育職の適性感に正の影響を与えていた。海外の先行研究では，教育実習生の教授効力はパフォーマンス接近目標と正の関連がみられていることからも（Nische et al., 2011），他者からの評価が必然的に問われる保育・教育場面において，パフォーマンス接近目標は職業への心理的適応感を反映する好ましい目標なのかもしれない。ただし，標準偏回帰係数の値自体は低く（β=.19），1年生においては有意差がみられなかったことからも，結果の一般化には更なる検証が望まれる。マスタリー目標，関係性目標，パフォーマンス接近目標に反して，パフォーマンス回避目標は1・2年生ともに理想の保育者像への志向性に負の影響（β=−.24, β=−.29）を与えており，心理的適応感に悪影響を及ぼす可能性が示唆された。海外の研究結果より，自身の劣った教授能力の披露を避けるパフォーマンス回避目標の高い教師は，職務満足度が低いこと（Papaioannou & Christodoulidis, 2007），教授効力が低いこと（Nitsche et al., 2011），エンゲイジメントが低くバーンアウトが高いこと（Parker et al., 2012）が示されており，一貫して心理的適応感と負の関連が示されている。また金子（2018）は，パフォーマンス回避目標のみが高い「回避目標志向型」の保育学生は，「多目標志向型」と「関係性目標志向型」のタイプの学生よりも，実習成果の得点が低いことを明らかにしている。本研究で示されたパフォーマンス回避目標の影響性は，これら先行研究の結果を追認するものとなった。

次に，達成目標志向性と保育職の継続意思の関連を検討した。保育職の継続意思に関して，「定年まで」（n=39），「出産まで」（n=128），「ライフイベントに伴う退職・復帰・継続」（n=21）といった比較的長期間の継続意思を持つ学生は，「結婚まで」（n=42）という短期間の継続意思の学生よりも，マスタリー目標と関係性目標が高く，パフォーマンス回避目標が低いことが示された。パス解析で得られた結果と同様に，保育職の継続意思の観点からも，マスタリー目標と関係性目標は好ましく，反してパフォーマンス回避目標は芳しくない目標であることが示唆された。教職選択満足度やキャリア形成への意欲が高い教職志望学生は，教職に内在する価値として，教授活動に対する興味や好意など内発的動機づけに関する内発的職業価値（intrinsic value）や，子どもの人間形成や社会貢献など利他的動機づけに関する社会的実用価値（social utility value）を高く認識していることが示されている（Watt & Richardson, 2007）。保育学生の保育職への進路決定やキャリア発達を促進する基盤として，内発的動機づけと関連するマスタリー目標や利他的動機づけと関連する関係性目標は，欠かすことのできない重要な目

標と考えられる。

さらに，達成目標志向性と理想の保育者像のカテゴリーの関連を検討した。その結果，まず理想の保育者像は8つのカテゴリーから分類され，多岐にわたることが示された。とりわけ，1・2年生に共通して高い頻度がみられたカテゴリーは，「態度」（1年生：33.0%, 2年生：24.0%）と「周囲からの信頼」（1年生：30.7%, 2年生：26.3%）であった。保育学生の多くは，保育者や社会人としてふさわしい態度を身につけ，子ども・保護者・教職員などの他者から信頼される保育者を志していることが示唆された。さらに，学年間で頻度の差があったカテゴリーは，「保育者としての指導力」（1年生：3.97%, 2年生：11.2%）であった。調査時点では，対象者の1年生は実習未経験であり，2年生は既に施設実習（2週間）と幼稚園観察実習（1週間）を経験していた。2年生が理想の保育者像として指導力の高さを重視している要因には，こうした教育・福祉現場での指導経験が契機になっている可能性が考えられる。次に，各カテゴリーの有群と無群において，達成目標志向性の得点に差がみられるかt検定を行った。その結果，子どもの心情を理解できる保育者を最も理想像に掲げている学生は，関係性目標が高いことが示された。すなわち，子どもの心情理解に長けた保育者を志す学生は，子どもとの温かな関係性の構築を通して，職務に対する達成感や充実感を感じるであろうことが示唆された。

最後に，本研究の課題と今後の展望について4点述べる。第一は，達成目標志向性と理想の保育者像のカテゴリーの関連における方法の問題である。本研究で表出された理想の保育者像は，学生の自由記述から表出させたものであり，ある保育者像の一側面が意識上に浮かばなかった可能性も考えられる。例えば，理想の保育者像として「心情理解」を記述した学生の中には，根底では「保育者としての指導力」をより理想の保育者像と考えていたかもしれない。質問紙の教示文に理想の保育者像の8カテゴリーが含まれていた場合，本研究と異なる結果が得られた可能性もあり，今後はこうした方法の問題点を考慮して検証する必要がある。第二は，本研究の対象者は保育者養成系短期大学の1校から得られた少数データであり，結果の一般化には慎重にならざるを得ないことが指摘できる。当然，大学間で地域差やカリキュラムなどの特徴に相違があり，また短期大学と4年制大学では学生の様相が異なる可能性がある。今後，こうした大学間の相違も考慮して検討することが課題となろう。第三は，学生の保育職への適応感を測定するに当たり，心理的指標だけでなく客観的な行動指標も加えて検証することである。例えば保育学生の達成目標志向性が就職活動時の活動状況や自主的な学習行動に与える影響を検討することで，本研究結果の妥当性をより高めることができると考える。第四は，本研究結果と既存の保育学生における達成目標志向性研究（金子，2016, 2018）の知見に基づき，保育学生に対する実践的な介入研究を推進することである。これまでの結果を踏まえると，保育学生の学習成果や保育職への心理的適応感を促すための介入の方向性は，マスタリー目標および関係性目標の向上とパフォーマンス回避目標の低減にあると考える。今後はこれらの達成目標志向性に影響を及ぼす教育支援プログラムを考案し，保育者養成に還元できる実践研究を展開することが課題と言える。

謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様方，また，本研究の執筆にあたりご教授を賜りました鹿毛雅治先生に対しまして，心より感謝の意を申し上げます。

注

[1] 仕事回避目標は少ない労力で職務を遂行することを目標とするものであり，例えば教師が「遠足のために授業がなくなった時」や「教える内容が簡単で教材研究の手間が省けた時」に達成感を感じるという項目内容で構成されている（Butler, 2007）。仕事回避目標は現場経験の少ない保育学生にとって想定しにくい内容と考えられるため，「幼稚園教諭志望学生版達成目標志向性尺度」（金子，2016）の下位尺度には含まれていない。

引用文献

Ames, C. (1992) Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, *84*, 261–271.

Benesse次世代育成研究所 (2012). 第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書Retrieved from: http://berd.benesse.jp/up_images/research/research24_pre1.pdf (2018年11月6日)

Butler, R. (2007) Teachers' achievement goal orientations and associations with teachers' help seeking: Examination of a novel approach to teacher motivation. *Journal of Educational Psychology*, *99*, 241–252.

Butler, R. (2014) Part2 What teachers want to achieve and why it matters: An achievement goal approach to teacher motivatiom. Richardson, P. W., Karabenick, S. A., & Watt, H. M. G. *Teacher motivation: Theory and practice*. New York, NY: Routledge.

Cho, Y. & Shim, S. S. (2013) Predicting teacher's achievement goals for teaching: The role of perceived school goal structure and teacher's sence of efficacy. *Teaching and Teaching*, *32*, 12–21.

橋本　翼 (2016) 保育者志望短期大学生のメンタルヘルスに関する探索的研究(2)UPI(学生精神健康調査)と短大生活不適応感および保育者効力感との関連　近畿大学九州短期大学紀要，*46*, 31–44.

石上智美・望月珠美・徳田克己・横山範子 (2001) 保育者養成校の卒業生における職場適応III―保育者の離職・転職の状況を中心に：2000年の調査結果より　日本保育学会大会研究論文集，*54*, 810–811.

金子智昭 (2016) 幼稚園教諭志望学生における教師の達成目標志向性尺度の作成　慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：人間と社会の探求，*82*, 37–44.

金子智昭 (2018) 保育学生の達成目標志向性が実習成果に及ぼす影響　慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：人間と社会の探求，*86*, 49–60.

嘉数朝子・島袋恒男・當山りえ・喜友名静子・友利久子・廣瀬真喜子 (1997) 大学生の「子ども観」に関する研究―保育職志望度との関連で―　琉球大学教育学部紀要第一部・第二部，*51*, 207–213.

嘉数朝子・渡嘉敷あゆみ (2000) 保育者効力感と幼児のコミュニケーション・スキル―保育者志望度との関連で―日本保育学会大会研究論文集，*53*, 728–729.

三木知子 (2016) 保育専攻学生の保育者効力感（PTE）に及ぼす実習自己評価の影響　神戸大学大学院人間発達環境学研究科　研究紀要，*9*, 147–155.

三木知子・桜井茂男 (1998) 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響　教育心理学研究，*46*, 203–211.

前田直樹・金丸靖代・畑田惣一郎 (2009) 保育者効力感，社会的スキル及び職務満足感が保育士の精神的健康に与える影響　九州保健福祉大学研究紀要，*10*, 17–23.

溝上慎一 (2001) 大学生の自己と生き方―大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学―　ナカニシヤ出版

水間玲子 (2004) 理想自己を志向することの意味―その肯定性と否定性について―　青年心理学研究，*14*, 21–39.

水間玲子 (2004) 理想自己への志向性の構造について―理想自己に関する主観的評定との関係から―　心理学研究，*75*, 16–23.

水間玲子 (2007) 自己形成の心理学　風間書房

村山　航 (2003) 達成目標理論の変遷と展望―「緩い統合」という視座からのアプローチ―　心理学評論，*46*, 564–583.

西山　修・田爪宏二・富田昌平・中川智之 (2004) 家庭からの巣立ち期における女性のアイデンティティ地位と職業意識との関係：保育者志望学生に対する予備的分析　家庭教育研究，*9*, 13–22.

西山　修・富田昌平・田爪宏二 (2007) 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造　発達心理学研究，*18*, 196–205.

西坂小百合 (2002) 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス，ハーディネス，保育者効力感の影響　教育心理学研究，*50*, 283–290.

Nische, S., Dickhäuser, O., Fasching, M. S., & Dresel, M. (2011) Rethinking teachers' goal orientations: Conceptual and methodological enhancements. *Learning and Instruction*, *21*, 574–586.

岡本浄実・新井野洋一 (2013) 保育職の職務と生活に対する満足度が職業継続意思に　日本体育学会大会予稿集，*64*, 336–337.

Papaioannou, A., & Christodoulidis, T. (2007) A measure of teachers' achievement goals. *Educational Psychology*, *27*, 349–361.

Parker, P. D., Martin, A. J., Colmar, S., & Liem, G. A. (2012) Teachers' workplace well-being: exploring a process model of goal orientation, coping behavior, engagement, and burnout. *Teaching and Teacher Education: An International Journal of Research and Studies*, *28*, 503–513.

Retelsdorf, J., Butler, R., Streblow, L., & Schiefele, U. (2010) Teacher's goal orientations for teaching: Associations with instructional practices, interest in teaching and burnout. *Learning and Instruction*, *20*, 30–46.

高見令英・桐原宏行・徳田克己・横山範子・横山さつき (1994) 保育従事者の職場適応に関する研究(1) 職種間比較を中心として日本保育学会大会研究論文集，*47*, 638–639.

高見令英・桐原宏行・徳田克己・横山範子 (1995) 保育従事者の職場適応に関する研究(3) キャリアパスを視点として日本保育学会大会研究論文集，*48*, 630–631.

田中昭夫 (2002) 保育者の蓄積的疲労兆候を加重にする要因・軽減する要因　保育学研究，*40*, 212–218.

田中秀明 (2002) 保育者養成校における学生の学習理由と保育者志向性および学校適応感ならびに保育職に関する効力感との関係　共栄学園短期大学研究紀要，*18*, 166–177.

山田剛史 (2004) 理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究　パーソナリティ研究，*12*, 59–72.

Watt, H. M. G., & Richardson, P. W. (2007) Motivational factors influencing teahing as a career choice: Developing and validation of the FIT-Choice scale. *The Journal of Experimental Education*, *75*, 167–202.